

---

# The Maze

アルファ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Maze

### 【コード】

N5309B

### 【作者名】

アルファ

### 【あらすじ】

目覚めたら謎の迷路に閉じ込められていた『俺』。生き延びるには、ここを脱出するしかない。



空と同じ色の地面は、まるでベッドのように柔らかく、そして温かった。

不思議な気分だった。このままずっとこうしていたいと思った。

すると、

空に一つの黒点が現れた。

そしてそれはコーヒーの染みのように広がっていった。

あっという間に空は黒くなってしまった。

間もなく自分の横たわっている地面までもが黒くなってしまった。

すると、今までふかふかだった地面が、何かに変わった。

それは小さな黒い小石を敷き詰めたようなものだった。





…。

思い出せない…。

えくと、俺の名前は…

やまぐちきよし…

山口 潔だ。

歳は…

34だ。

その他に身長、体重は何とか思い出せた。  
しかしそれ以外の物事がどうしても思い出せない。

…。

10分程思い出そうと頑張ってみたが、どうしても思い出せない。  
俺は諦めて今、目の前にある事をどうにかすることにした。

俺は歩くために立ち上がろうとした。

ジャラッ

今、気付いた。手首に違和感がある。

手錠がはまっている。

そして手錠のもう片側は、青い金属製アタッシュケースの取っ手に繋がっていた。

俺はそのアタッシュケースを開けようとした。

「ダメだ・・・」

ロックされている。開けるためには鍵が必要だ。

よく見ると、そのアタッシュケースには定期券ほどのサイズの液晶が付いている。しかし今は何も映っていない。

・・・。

そんな事よりここを出るのが先じゃないか。  
俺はこの場所を探索してみた。



つきり拳でぶっ叩いた。

その時だった。

ピー

足元から電子音がした。

それは俺の手首からぶら下がっているアタツシユケースからの音だった。

すると、アタツシユケースに付いている液晶が光った。

液晶画面が光った。

俺は暴れるのを止め、座ってじっと画面を眺めた。

画面に何かが映っている。

真っ白な空間に何かが浮いている画像だ。

何が浮いているんだろう？

俺は顔を画面に近づけた。

浮いているのはどうやら青のアタッシューケースのようだ。

3

数字が画面に浮き出てきた。  
何の数字だ？

その「数字」は別の字に変化した。

2

「2」に成った。

1

「1」に成った。そして、

0

「0」になった瞬間、画面の中のアタッシュケースが爆発した。

何だこれは。

続いて文字が浮かび上がった。

『生きたければ』

生きたければ…？

『これを探せ』

画面が一瞬フラッシュした。何かが見えた。これは…

青の鍵…？

映像が切り替わった。

昔の時代の白黒の映像のようだ。ノイズも激しい。

何か映っている。

何も無い空間に何かが浮いている。

それは黒くて正方形の形をしていて、中央に白い＋（プラス）が書いてあった。

それは俺の閉じ込められている部屋にある黒パネルと同一のものだと気付いた。

俺は何が起こるんだろうと画面をじっと見つめた。

ピエロの格好をした男が画面の端から出てきた。そいつはスキップをしながらパネルに近寄って行く。

そしてパネルに手をつけた。

約三秒後、そのパネルは4つに分割し、地面に落ちた。

画面が切り替わった。  
字が浮き出てきた。

『山口 潔の死まで』

ゾクツとした。何だこれは。

その字の下にこんな表示が出てきた。

30:00

ん？

29：59

まさか・・・

29：58

カウントダウンだ。何のために・・・。

・・・！！

俺は爆発するアタッシュケースの映像を思い出した。

まさかこのケースの中身は・・・

爆弾。

俺は頭が真っ白になった。

『生きたければこれを探せ』

青の鍵。

探さなければ死ぬ。

## 第二章 始まりと出会い

「チクシヨウ!!!!!!」

俺はがむしゃらに手錠の鎖を外そうとした。

なんとって自分は手首から爆弾をぶら下げているのだから。

しかし手錠の鎖は硬く、手で無理矢理引っ張っても外れそうに無い。

その時俺はあることに気がついた。

「ランプ・・・？」

手錠の輪の部分に三つのランプが付いている。

一つは緑、もう一つは黄、そして最後は赤。

現在点灯しているのは緑だけで、後の二つはまだ点いてない。

それは信号のように思えた。

いや、そんなことは今はどうでもいい。

俺は鎖を外すための道具を探してみることにした。

まずは部屋をいろいろ探してみたが何も無い。

そこで自分の服を探ってみることにした。

今気付いたが、俺はスーツ姿だった。

俺は仕事帰りにでも捕まったのか。  
全く覚えていない。

・・・！

スーツの胸ポケットに何か入っている。  
俺はそれをつかんで取り出した。

鍵だ。赤い鍵。

大きさからして、手錠の鍵では無さそうだ。  
ならば・・・

早速俺はアタッシュケースの鍵穴に嵌めてみた。

ダメだ・・・。

回らない。

どうやら違う鍵のようだ。

俺は他にも何か無いかと全身を探ってみた。

「何も無い・・・」

鍵の他には何も無かった。

俺はふとタイマーを見た。

24:42

5分ほど減っている。  
時間が無い。

「早くここから出る方法を探さないと・・・」

床にある黒いパネルが目に入った。

映像ではピエロはあのパネルに手をつけていた。

早速俺もパネルに手をつけてみた。

三秒ほど触っていると、

ピピッ

そんな音がした、そして

ウィン

開いた。

パネルが四つに分かれ、そして引っ込んだ。

「これは・・・!!!」

俺が見た景色、それは

この部屋と全く同じ構造の青い部屋。  
どうやら発光パネルが青のようだ。

まさか・・・!

俺はそこを離れ、別のパネルを開いてみた。

やはり同じ構造の、黄色い部屋。

嘘だろう・・・!?

また別のパネルを開けた。

同じ構造の、赤い部屋。

後の二面の壁のパネルを開けてみたが、結果は同じだった。同じ構造の、緑と紫の部屋があった。

外に出られない。

残るは・・・

天井。

天井にもパネルがあった。

壁にはそれぞれ二本ずつ十五センチ程の幅の梯子がついているため、何とか天井まで登ることが出来た。

パネルを開けてみた。

「クソッ・・・」

やはり同じ構造の部屋があった。オレンジ色だ。

俺はパネルの縁に手を掛け、腕の力だけで懸命に上の部屋によじ登った。

何とかに登りきることが出来た。

しかし登り切ったとたん俺は体力、精神力共に疲れてへたばってしまった。

そしてタイマーを見た。

20:14

また五分程減っている・・・

このままでは・・・

俺に残された時間は少ない。だから、こんな所でへたばっている余裕は無い。

自分にそう言い聞かせ、何とか立ち上がった。

そして、すぐ近くにあった壁のパネルを開けた。

またしても同じ構造の赤い部屋があった。

爆発まであと 20分





その時だった。

「おー……い……だ……か……いる……か……」

かすかに声が聞こえた。

「誰か居るのか!？」

俺はそう叫び、声のした方向のパネルを開けた。

そこには体つきの良い、髪を金髪にした青年が居た。  
歳は二十代程で、赤いロゴの入ったTシャツを着ていた。

そして俺はその黄色の部屋に入った。

「良かった、オレ以外にも人がいたのか。」

そう言って笑顔で俺に近づいてきた。

その青年の手首には、

手錠で繋がれた、爆弾入りの赤いアタッシュケース。

「そついやあんた、赤い鍵のある場所とか知ってる？」

ずいぶん馴れ馴れしいヤツだ。

「赤い鍵？ それなら持つてるぞ。」

「マジ！？ 今必要なんだ！ 貸してくれ！」

俺は素直に鍵を渡した。

青年は鍵を受け取ると、自分のアタッシュケースの鍵穴に嵌めた。

回った。

すると、鍵が鍵穴に吸い込まれていった。

そして、アタツシユケースが開いた。

中には、爆弾と透明カバーのかかった赤いボタンがある。

青年は迷わずカバーを外し、ボタンを押した。

ピピッ

青年のアタツシユケースの液晶画面に、『解除成功』の文字が表示された。

「良かった、助かった。」

青年は安堵の表情を浮かべた。

そういうことか。

自分のアタツシユケースを開けるには、そのアタツシユケースと同じ色の鍵を探さねばならないのだ。

そして、その鍵は他人が持っている。つまり、助かりたいのなら仲間を探せという事なのだ。

「おい、君も鍵を持っているんじゃないか？ 早く貸してくれ。」

「あ、ああ。」

青年はポケットから鍵を取り出した。そして俺に渡した。

俺は青の鍵を期待した。しかし、

「緑の鍵……」

それは青ではなく緑の鍵だった。一応鍵穴に嵌めてみたが、当然回らない。

爆弾はまだ解除することが出来ない。

「鍵、合わないのか？」

「ああ、そのようだ……。」

俺は落ち込んで、その場に座り込んでしまった。しかし、青年が励ましの言葉を掛けてくれた。

「オッサン、そんなに落ち込むなよ。青い鍵持ってる奴を頑張ってる探し出せばいいんじゃないか。」

そうだ。探せばよいのだ。まだ死ぬと決まった訳じゃない。諦めたらそれこそ死ぬ。

「そつだな、ありがとう。俺の名前は山口 潔だ。君、名前は何て言う？」

「古賀 進だ。山口サン、頑張ろつぜ。」

「ああ。こんな場所で死んでたまるか。」

俺は立ち上がった。

爆発まであと9分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5309b/>

---

The Maze

2010年10月10日00時09分発行